

は若干の工夫を要する。精緻な観察は古人に縁が無いやうに思ふ人は、此等の句を玩味しなければなるまい。

裁物にせばき一間や冬籠夕市

一間に在つて裁物をする。裁板も置かねばならず、裁つた布もあたりにひろがるから、自然一間のうちは狭くなる。平凡だと云へばそれまでであるが、その裏に平凡ならざる何者かを藏してゐる。

この句に在つて一間を狭しと感ずるのは、必ずしも裁物をする人自身ではない。作者は裁物の人と同じ一間に在つて、傍から観察してゐるものの如く感ぜられる。即ち裁物の爲に一間が狭くなることは共通であつても、自ら裁物をひろげつゝある人の感じとは若干の距離がある。この場合衣を裁つ者は當然女であらうから、作者はその外に求めなければならぬのである。

冬籠る一間は廣きを要せず、狭くとも暖きを條件とする。居間の狭くなることを叩つたやうなこの句も、その條件には外れてゐない。しづかにこの句を誦すると、裁たれる布の華かな色は勿論、座邊の火鉢に火のかん／＼おこつてゐる様まで、連想として浮んで来る。

湯のぬるき居風呂釜を脚婆かた還珠

この句は冬の季にはなつてゐるが、何の季題に分類すべきかといふことになる、ちよつと判断に苦しませざるを得ぬ。第一下五字はどう讀んだらいいのか、よくわからない。俳句の振假名はかういふ場合に最も必要なのだけれども、却つてそれがついてゐないのである。

さういふ問題はしばらく措いて、この句の意味はどうかと云へば、格別面倒なことも無い。居風呂に入つたところが、いさゝか湯がぬるいので、脚を直接風呂釜に當てゝ見た、といふ意味らしく見える。五右衛門風呂の中に浮いてゐる板の用途がわからないで、蓋の類と心得て取つてしまつた爲、直接釜に觸れる足の熱さに堪へず、下駄穿のまゝ風呂に入つて、遂に釜を踏み破る話が「膝栗毛」の一趣向になつてゐるが、この句は湯がぬるくなつてゐるから、釜に足を觸れても熱くないのである。

俳諧では湯婆と書いてタンポと讀んでゐる。この上に更に一字を添へた「湯たんぽ」といふ言葉が一般に通用してゐるのは、幸田露伴博士が考證したチギ箱の例のやうに、一つ言葉を補はなければわかりにくい爲かも知れぬ。湯婆と風呂とは目的を異にするが、湯で身體を温める

點に變りは無い。湯婆の如く釜で脚を温めるといふ意味から、脚婆といふ語を造り出したのではあるまいか。湯の字と婆の字とが一句の中に在り、且脚を温める作用をも取入れてゐるので、強ひて分類すれば湯婆の範圍にでも入るべきかと思ふ。但これは臆測である。正解があれば何時でもそれに従ふことにする。

鐵砲の水田になりて里の冬 蘆文

稻を刈つた跡の田が刈田で、それが冬に入れば冬田になるといふのが、季節の上の常識になつてゐる。こゝにある「水田」は普通に云ふスキデンの意味もあるかも知れぬが、同時に稻を刈つた跡の田が暫く水を湛へてゐることを現したものでないかと思ふ。

さういふ水田に雁鴨その他の鳥が何か糞りに下りる。それを目掛けて頻に鐵砲を撃つ。蕭條たる冬の里には日々何事もなく、たゞ水田に俯する鐵砲の音が聞えるのみだといふのであらう。吾々も少年の頃、東京郊外の田圃で屢々かういふ感を味つた。「鐵砲の水田になりて」といふだけで、直に右のやうな趣を感じ得るのは、過去の經驗が然らしむるのかも知れない。

古句を観る

出版台承認イ260679

昭和十八年十二月十日 印刷
昭和十八年十二月十五日 發行

(初刷五、〇〇〇部)

定價二圓六十錢
特別行爲税相當額二十錢

合計二圓八十錢

著作者	柴田宵曲
發行者	渡邊新
印刷者	大熊整
發行所	七文書院

配給元 日本出版配給株式会社
東京都神田區淡路町二ノ九

(東京1.901 大熊整美堂第三工場)

高濱 虚子

大野 林 火 著

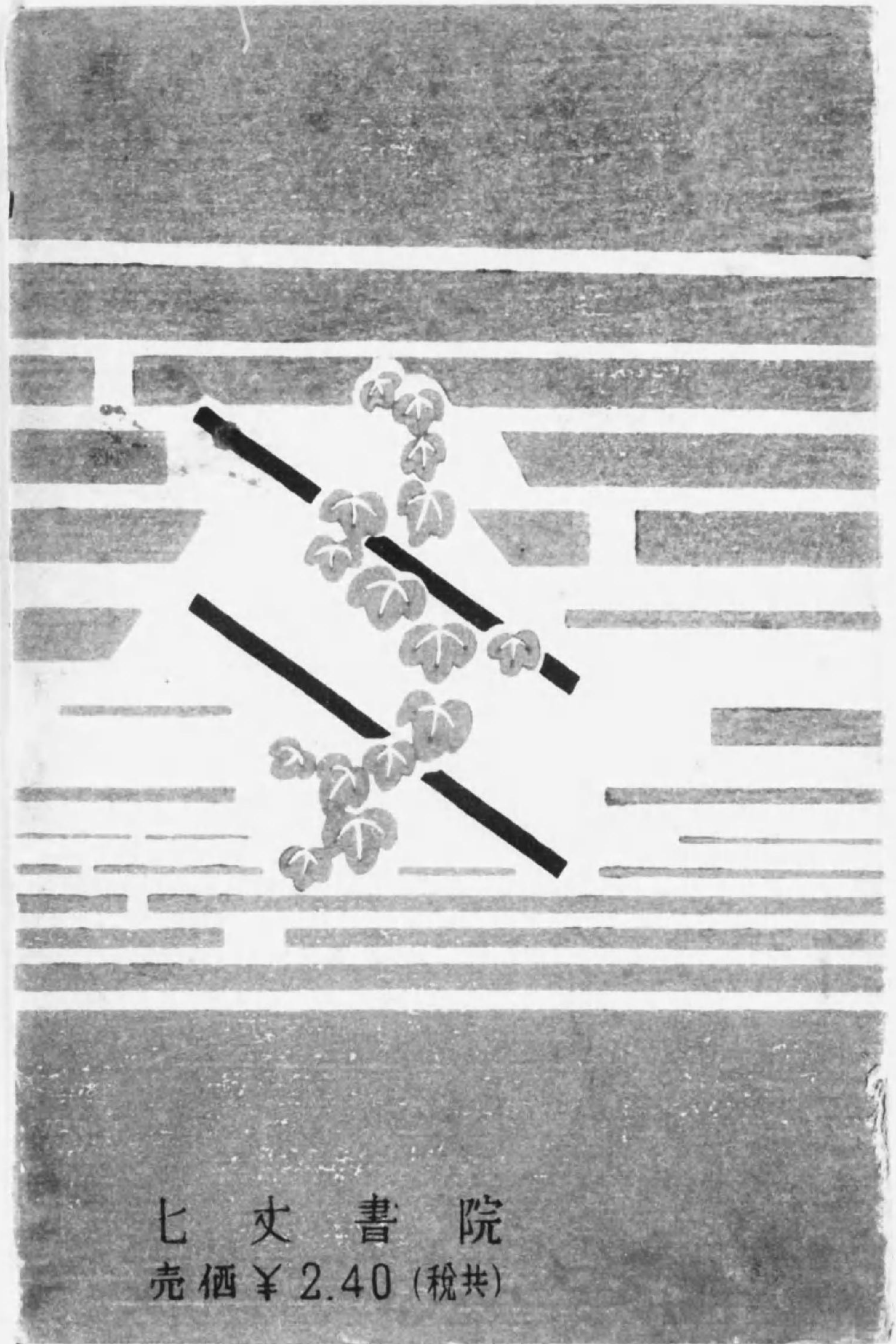
假綴美本 二・四〇
B 6 三二〇頁 一・一五

本書は虚子翁の代表作品を骨子に、明治時代上(子規生存時代)・明治時代下(虚碧併立時代)・大正時代(所謂寫生時代)・昭和時代(花鳥諷詠時代)に便宜四大別し、翁五十年間の作句傾向の變遷、俳句觀の推移、人間的生長過程等を、限なく實證的に考察して翁の全貌を究めたる良書。

句集 密林の突撃	吉田忠一著	一・五〇頁・一五
句集 ふるさと	長谷川素逝著	二・二〇頁・一五
句集 埠頭	五十嵐播水著	一・八〇頁・一五
句集 嵯峨野	奥田雀草著	一・七〇頁・一五
句集 旗雲	田村萱山著	一・五〇頁・一五

984
81

終



七丈書院
売価 ¥ 2.40 (税共)